

---

# 紺色の朝に

雪芳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紺色の朝に

### 【Nコード】

N4871J

### 【作者名】

雪芳

### 【あらすじ】

渋谷駅に、倒れている青年がいて。

渋谷での話だ。

早朝、小雨で少し濡れた渋谷駅は生ゴミのような臭いが漂っていた。店はほとんど閉まっており、昼間と比べると驚くほど人が少なかった。

私は渋谷の国学院大学に用事があり、しかしながら早く来すぎてしまったため、駅周辺をふらふらしていた。

青ざめた夜と朝の中間、夏場だったので空気が生温く過ごしやすい。けれど見るものはなかった。ひとつふたつ、朝御飯や弁当を売る店が開いているだけだった。

「ん？」

ふいに、駅の隅で壁に頭だけもたれるようにして倒れている人を見かけた。近寄ってみると、大学生風の男の子だった。

ぐったりと脱力していて顔色が悪く、深く目を閉じている。刺激に対しほとんど反応がない。状況から推測するに、アルコールを飲みすぎてしまい歩けず、横になっているのだろう。

「おはようございます、大丈夫ですか」

手を握り声を掛けながら、更に様子をみる。唇は乾いていないし、低体温に陥っていないし、脈も正常だ。

大丈夫だろうと思いつつも心配になり、三十メートルほど離れた場所にある交番へと向かった。交番の前には三人の警察官が立ち、時おり人に道を教えている。

警察官にあと少しというところで、なんでこんなにも近い場所に人が倒れているのに保護しないのだろうという疑問が沸いた。

もしかしたら、青年のような状態の人は日常茶飯事なのかもしれない。警察官は既に声をかけていて、大丈夫と判断したのかもしれない。しかしながら、ちょうど死角となっていて交番からは青年が確認できない。

どうしたものかと迷って私は、警察官の前を通りすぎ、さもそちらに用があったかのように脇にある地図を見つめ、再び青年の方へと歩き出した。

私が警察官に声をかけることは、警察官にも青年にも迷惑となりそう。かといって青年が起きるまで様子を見るわけにもいかない。私はどうしても行かなければならない用事があった。

困ったものだと少し嘆きつつ歩いていると、青年のそばに新たな人物が立っていた。汚れきつてよれよれになった服を着込んだホームレスの中年男性が、白髪の間違った髭をもぞもぞとしながら、傘を使って青年のだらんと脱力した足を動かしていた。

私が見ているのに気づくと、男性は

「変なことにはなにもしてないよ」と、一歩下がった。そんなことは一目瞭然だ。「足が出ていると誰かが踏むでしょ、危ないからね、こうして」

焦りに焦っている口ぶりに

「あつ、大丈夫です。わかります」とこちらも思わず焦ってしまう。

「お友だちには何もしてないからね、盗んでもいい」

「いえ、知り合いではないんです。少し心配になりました」

私の言葉を聞いて、男性ははにかんだような笑みをこぼした。「そうなの。じゃあ大丈夫だよ。俺が様子をたまに見るからね」

口調からか街と時間の性質を思ってか、男性は私を見送るように片手をあげた。

「すみません、よろしく願います」

男性の好意に甘えることにして、私はその場を立ち去ることにした。少し離れてから振り向くと、男性もまた傘を片手にどこかへと足を向けていた。

国学院大学での用事を済ませて渋谷に着いたのは午後の五時を回ったところだった。既に青年の姿はいない。目覚めて家にも帰ったのだろう。あの男性もいない。ホームレスは朝の仕事を終えると大概、地下や公園に涼みに行くものだ。

ふいに、男性の行動を思い出した。あの言葉、あの警戒心は、何らかの経験によるものだ。あんなにも素直に動揺する人は、トラブルを予期した上で道具を使ったりはしない。以前、善意を勘ぐられたことがあるのだろう。ホームレスなら、尚のこと。

私も無意識に危険な行動をとっていたのだろうかと苦笑する。と同時に、簡単に疑われてしまう世の中に少し悲しくなった。

青ざめた湿つばい早朝、今でもたまに思う。

あの青年は酒を飲みすぎないようになっただろうか。

あの男性はお元気だろうか。

(後書き)

2008年作成

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4871j/>

---

紺色の朝に

2010年12月14日19時19分発行